

フランス教育制度と職業参入

吉本, 圭一
放送教育開発センター研究開発部助教授 | 日本労働研究機構共同研究員

<https://hdl.handle.net/2324/18791>

出版情報：フランス教育制度と職業参入, pp. 1-3, 1993-07. 日本労働研究機構
バージョン：
権利関係：



第2章 教育から職業への参入

第1節 中等教育段階と就職

1. 中等教育段階における水準Ⅳと水準Ⅴ

1) 第Ⅳ水準の各資格

後期中等教育段階を修了することで取得できる資格は第Ⅳ水準であり、さまざまな資格に対応して、5つの教育・訓練の課程が存在している。すなわち普通教育バカロレア、技術バカロレア、職業バカロレア、テクニシャン免状、職業免状の諸課程である。図2-1-1のように、80年代後半からのそれぞれの科目のバカロレア取得数の増加が著しいことが見てとれる。

これらの課程修了者は、バカロレアであれば原則として高等教育での学業継続が可能であるけれども、程度の差はあれ、実際には多くの部分が職業生活に入っている。また、学校は修了しながらも最終的にこの段階で資格取得ができない可能性もあり、また高等教育へ進学しても中退などで第3資格を得られないで社会に出る可能性もある。

すなわち、中等教育における最終級は、進路選択の最大の分岐点である。CEREQ（資格調査研究センター）の1983年の最終級修了者対象のEVA調査の結果から、この段階の修了者の進路を図示してみよう。すなわち、図2-1-2のように、中等教育修了から、第Ⅲ水準以上の資格取得まで学業継続したのは58.6%であり、残りの41.4%まで第Ⅳ資格水準で社会に出ている。第Ⅳ水準といっても、その範囲はひろく、図のように高等第Ⅳ水準という高等教育経験者、バカロレア取得後直接就職者、バカロレア取得に至らずに学校を修了した者と、教育経験の違いがあることがわかる。

なお、性別には、表2-1-1のように、男子の方が61.9%まで第Ⅲ水準以上の資格を取得しているのに対して、女子では56.4%に留まっている。また、第Ⅳ水準でのバカロレアからの直接就職者が女子に多い。

修了者の年齢でみると、表2-1-2のように、18歳以下で最終級を修了した遅滞のないグループほど、19歳以上の留年等の遅滞経験グループよりも、確実にバカロレアレベルの資格を取得し、より高等教育へ進学し、より第Ⅲ水準以上の資格を取得していることがわかる。

図 2-1-1 バカロレア取得者数の変化

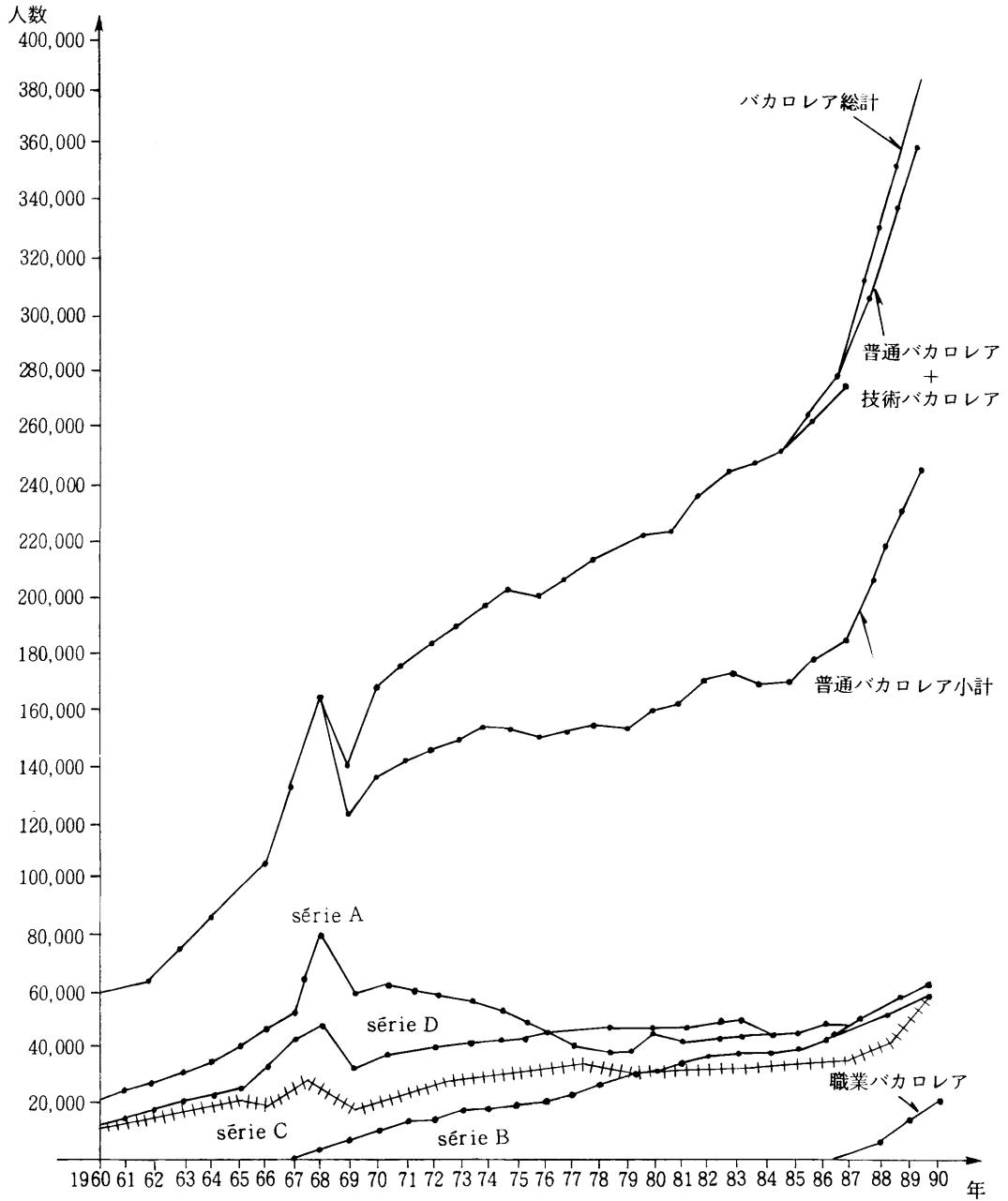


図 2 — 1 — 2 中等教育最終学年の生徒の 3 年後における資格取得状況

	第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ水準 59 %	182,900	バカロレア取得後、 高等教育進学者
高等第Ⅳ水準と して離学	13 %	40,300	
中等第Ⅳ水準と して離学	10 %	31,000	バカロレア取得後、 職業生活へ直接参入
	18 %	55,800	バカロレア未取得



1983年バカロレア志願者で、かつ1983年度に留年した者を除く。

表 2 - 1 - 1 1983年バカロレア志願者の1986年段階での資格取得状況

	男子	女子	男女計
第Ⅲ水準以上の資格取得者 (B A C + 2 年)	76,366 61.9%	102,312 56.4%	178,678 58.6%
バカロレア後の高等教育中退者	15,280 12.4%	24,514 13.5%	39,794 13.0%
バカロレア後に直接職業生活を 開始したもの	9,429 7.6%	20,623 11.4%	30,052 9.9%
バカロレア最終試験不合格の者	22,359 18.1%	34,032 18.7%	56,391 18.5%
第Ⅳ水準小計	47,068 38.1%	79,169 43.6%	126,237 41.4%
バカロレア志願者コーホート 合計	123,434 100%	181,481 100%	304,915 100%

注：1983年バカロレア志願後、1983-84年度に留年しなかった者を対象としている。

表 2 - 1 - 2 バカロレア取得年令と3年後の資格取得状況

(%)

		バカロレア 試験不合格	バカロレア 取得後に直 接職業生活 を開放	バカロレア 後の高等教 育中退	第Ⅳ水準小 計	第Ⅲ水準以 上の資格取 得	バカロレア 志願者コー ホート合計
男 子	18才未満	10	19	26	17	53	40
	19才	36	39	39	38	32	34
	20才以上	54	42	35	45	15	26
	計 (実数)	100 (22,359)	100 (9,429)	100 (15,280)	100 (47,068)	100 (73,366)	100 (123,434)
女 子	18才未満	20	29	40	29	63	48
	19才	48	42	40	42	28	34
	20才以上	37	29	20	29	9	18
	計 (実数)	100 (34,032)	100 20,623	100 24,514	100 79,169	100 103,312	100 181,481
男女計	18才未満	16	26	35	24	52	45
	19才	40	41	40	40	30	34
	20才以上	44	33	25	36	18	21
	計 (実数)	100 (56,391)	100 (30,052)	100 (39,794)	100 (126,237)	100 (178,678)	100 (30,4915)

資料出所：CEREQ, "Niveau IV de formation et baccalauréats professionnels", Collection des Etudes, No. 49 1989, P 45

2) 第Ⅴ資格水準と就職

中等教育を所定年数経験しても、最終級を修了しなければ、第Ⅴ水準の資格に位置づけられることになる。若年者の雇用が減少し、同時に、「若年対策」によって失業も減少するとともに、ますます多くの青年がより長い期間、学校教育を継続するようになっている。しかし、各水準においては、資格や免状を取得しないで「卒業」する者が多くなっている。つまり、リセやコレージュから適切な資格を取得しないで、水準Ⅴ以下の資格として職業生活を開始する若者が多くいるのである。

C E R E QのE V A調査(1976年－1988年)の結果をみると、1976年以来、リセやコレージュを卒業後、数か月において観察された青年の状況にはある特徴がある。雇用の引き締めとともに、採用は、訓練歴に関してますます選別的になってきている。卒業段階や教育免状、そしておそらくそれ以上に、訓練の専門分野が、採用場面で重要な役割を果たしている。一般的に、工業技術系の課程は、とりわけそれが教育免状によって承認されるならば、第3次産業部門よりも直接的に雇用に結びつきやすいと指摘されている(表2－1－3)。

1988年に、コレージュやリセから離学後7ヵ月で職業に就いている青年は実に5人中の1人以下であり、こうした若年労働市場の厳しい状況が続いている。つまるところ、職業生活の開始においては、教育免状の有無や取得した専門分野が、教育訓練の経験年数よりも重視されるためである。

表 2 - 1 - 3 第Ⅲ水準から第Ⅴ水準までの専門分野と職業参入指標

	男 子				女 子				男 女 計			
	就職者数	離学1年 以内の就 職 (%)	初 職 で 安 定 的 雇 用 (%)	通算1年 以上の失 業経験 (%)	就職者数	離学1年 以内の就 職 (%)	初 職 で 安 定 的 雇 用 (%)	通算1年 以上の失 業経験 (%)	就職者数	離学1年 以内の就 職 (%)	初 職 で 安 定 的 雇 用 (%)	通算1年 以上の失 業経験 (%)
第 2 次 産 業 系	第Ⅲ水準											
	DUT	4,554	90	47	5	1,133	80	38	16	5,687	88	45
	BTS	5,302	92	49	4	847	86	43	10	6,149	91	48
	第Ⅳ水準											
	BTn (F)	11,336	89	34	9	1,949	84	32	20	13,285	88	34
第 3 次 産 業 系	BAC (C, D, D', E)	8,157	89	39	7	7,937	87	36	13	16,094	88	37
	BT	2,771	87	33	15	688	89	42	20	3,459	88	35
	第Ⅴ水準											
	BEP	27,060	95	30	8	2,243	87	25	25	29,303	94	29
	免状取得	5,717	90	28	14	556	65	23	33	6,334	87	27
第 3 次 産 業 系	CAD	35,619	95	40	10	7,459	85	31	33	43,164	93	39
	免状取得	19,916	90	31	20	3,128	77	26	49	23,102	87	30
	第Ⅲ水準											
	DUT	3,092	91	64	3	4,315	89	54	12	7,407	90	58
	BTS	2,093	92	67	3	8,607	94	49	7	10,700	94	53
第 3 次 産 業 系	第Ⅳ水準											
	BTn (G)	8,470	86	30	12	38,109	88	28	21	46,579	87	28
	BAC (A, B)	10,164	85	33	14	25,793	81	27	19	35,957	82	29
	BT	722	93	37	12	764	90	43	25	1,486	91	40
	第Ⅴ水準											
	BED	8,341	86	28	20	44,716	86	22	30	53,098	85	23
第 3 次 産 業 系	免状取得	2,139	80	24	35	8,763	78	21	40	10,968	79	22
	CAP	1,953	89	31	19	20,767	80	23	42	22,117	77	22
	免状未取得											

資料出所：CEREQ, "Niveau IV de formation et baccalauréats professionnels", Collection des Etudes, No. 49 1989, P. 45

2. 第Ⅳ水準の各資格と就職

後期中等教育にあたるリセや職業リセでは、資格取得なしに中退すれば第Ⅴ水準の資格に終わるし、バカロレア等を取得すればDUTやBTSなど第Ⅲ水準資格も目前にある。この前後の段階からの就職の容易さと、職業的位置づけを、CEREQが1983年の資格取得者を対象として1986年まで実施したEVA調査によって比較してみることにしよう。

表2-1-4は、教育資格タイプ別に、教育制度を離れた時点から就職に至るまでの時間を比較したものである。全体として、学校を離れて6ヶ月以内に就職した者が75%、1年以内までひろげると86%が就職している。性別では、大きな開きはなく、男子の方が6ヶ月以内の就職者数が3%ポイント多くなっている程度である。ただし、資格間の比較を加えてみると、女子の普通教育バカロレアでは6ヶ月以内の就職が72%であり、女子のテクニシャン免状取得者の78%と比較して、就職の決定時期が遅くなっている。男子でも普通教育バカロレアの方が就職が他よりも遅い傾向はあるが、男子では第3次産業向けの技術バカロレアの就職も同じく遅くなっている。

表2-1-4 1983年バカロレア志願者の専門分野と初職入職までの期間

1) 性別計

	離学後の初職までの期間		就 職 者 数
	6ヶ月以内	1年以内	
第2次産業系 技術バカロレア(BTn)	77%	88	13,285
第3次産業系 技術バカロレア(BTn)	75	87	45,579
第2次産業系 テクニシャン免状(BT)	77	88	3,459
第3次産業系 テクニシャン免状(BT)	81	91	1,486
普通バカロレア	73	84	52,051
合計	75	86	116,860

2) 男子

	離学後の初職までの期間		就 職 者 数
	6 ヶ月以内	1 年以内	
第2次産業系 技術バカロレア(BTn)	77%	89	11,336
第3次産業系 技術バカロレア(BTn)	75	86	8,470
第2次産業系 テクニシャン免状(BT)	77	87	2,771
第3次産業系 テクニシャン免状(BT)	86	93	722
普通バカロレア	76	87	18,321
合計	77	87	41,620

3) 女子

	離学後の初職までの期間		就 職 者 数
	6 ヶ月以内	1 年以内	
第2次産業系 技術バカロレア(BTn)	73%	84	1,949
第3次産業系 技術バカロレア(BTn)	75	88	38,109
第2次産業系 テクニシャン免状(BT)	81	89	688
第3次産業系 テクニシャン免状(BT)	77	90	764
普通バカロレア	72	83	33,730
合計	74	85	75,240

注：集計対象は、1983年にバカロレアを志願し、1983年度に留年せず、第IV資格水準で、1983年から1986年までに社会にでた者である。

出所：B.Guilliet et F.Pottier,1989, 'Insertion Professionnelle et Recrutement des Jeunes au Niveau de Baccarlaureat', Collection Des Etudes No.49, CEREQ

同じ第Ⅳ水準の中での教育経験別の職業参入までの経過をみると、表 2-1-5 のように、バカロレア未取得の者よりもバカロレアを取得した方が、さらにバカロレア取得で直接就職するよりも、中退してでも高等教育を経験した方が、職業参入がより円滑にすすむことがわかる。

次に、それぞれの就職者の職業を社会職業カテゴリーに位置づけてみよう。このために、1983年の第Ⅲ水準から第Ⅴ水準までの資格取得者の職業参入の結果を資格水準と教育資格タイプ別に比較してみたものが、表 2-1-6 である。ここでは、各資格を、一方で、第 2 次産業に対する科学的な普通教育と技術的なテクニシャン教育、他方で第 3 次産業では、人文学的な普通教育とビジネス志向の技術教育というように区分してある。

表をみると、第 2 次産業の分野を目指した教育資格に関しては、科学系の普通教育バカロレアも技術バカロレアも就職において、多くが良好な条件を享受しており、4 割以上はカードルないし中間的職業—付属資料 3 職業分類を参照—(professions intermediaires) の位置づけを得ている。第Ⅲ水準ではほとんどがこのカテゴリーに入ることからすると、その差異はもちろんあるが、第Ⅴ水準のほとんどが労働者 (ouvriers) に位置することと比べて、はっきりと教育・資格取得の効果が見られる。テクニシャン免状に関しては労働者が多く、他の科学・工業系の第Ⅳ水準資格よりも職業的に不利な位置づけになっている。

これに対して、第 3 次産業分野では、技術バカロレア・普通教育バカロレア・テクニシャン免状ともに、カードル・中間的職業に位置づけられることが 3 割以下と少なくなっている。DUT の 62 %からは大きく水を開けられた状態であり、BTS の 43 %と比べても差があり、水準ⅢとⅣとの差が大きい。これに対して、水準ⅣとⅤとの差は、それほどでもないことがわかる。

表 2-1-5 1983 年バカロレア志願者の雇用機会と失業

1) 第IV水準・男子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
(1)離学30ヶ月後の 安定雇用の獲得	55	64	70	64
(2)離学6ヶ月以内での 初職獲得	72	72	78	75
(3)通算1年以上の 失業経験	12	8	7	9
(4)「不安定就業」	7	5	4	5

2) 第IV水準・女子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
(1)離学30ヶ月後の 安定雇用の獲得	51	65	66	61
(2)離学6ヶ月以内での 初職獲得	62	69	80	71
(3)通算1年以上の 失業経験	30	25	13	22
(4)「不安定就業」	19	17	9	15

注：バカロレア志願者のうち、最終的に高等教育の第1から第3水準の資格を取得した者を除く。

(1)教育システムを離れて30ヶ月後に期間無限定の労働契約を結んでいる者の比率

(2)教育システムを離れて6ヶ月以内で最初の職についた比率

(3)30ヶ月以内に通算1年以上の失業期間を持つ者の比率

(4)通算1年以上の失業期間を持ち、一時的雇用以外に働いた経験を持たない者の比率

出所：CEREQ、EVA 調査1988年。

D.Blondet,1991, 'Le Bac et l'Emploi', BREF No.65, CEREQ

表 2-1-6 第Ⅲ水準から第Ⅴ水準の専門分野と就職者の社会・職業カテゴリー

専門分野	就職者の社会・職業カテゴリー	第Ⅴ水準	第Ⅳ水準			第Ⅲ水準	
			テクニシ オン 免 状 BT	技 術 バカロレア BTn	普 通 バカロレア Bac	上級技 師学位 DUT	上級技 師資格 BTS
第2次産業系	カードルまたは準専門職 (Cadres ou Professions intermediaires)	3.5 (%)	31.9	42.4	46.5	91.0	90.4
	事務職員(Employes)	85.8	46.1	35.8	9.6	5.3	7.0
	労働者(Ouvriers)	10.6	18.8	20.5	41.7	3.7	2.5
	その他	0.1	3.2	1.3	2.2	—	0.1
	対象数	70,000	2,644	9,875	11,521	5,218	5,727
第3次産業系	カードルまたは中間的職業 (Cadres ou Professions intermediaires)	2.4	25.9	12.0	27.9	62.0	42.8
	事務職員(Employes)	14.0	11.2	4.9	8.1	0.6	0.4
	労働者(Ouvriers)	83.6	59.5	82.1	61.1	37.4	56.7
	その他	—	3.4	1.0	2.9	—	0.1
	対象数	65,000	1,095	35,409	23,970	6,996	10,368

注：専門分野は、たとえば技術バカロレアであれば、F 8 科と G 科が第3次産業系へ、普通バカロレアであれば、A 科、B 科が第3次産業系へというように分類している。

出所：B.Guilliet et F.Pottier,1989, 'Insertion Professionnelle et Recrutement des Jeunes au Niveau de Baccalauréat', Collection Des Etudes No.49, CEREQ

次に、表 2-1-7 および表 2-1-8 は、各社会職業カテゴリーへの就職を、同じ第Ⅳ水準の中での教育経験別に比較したものである。男子の方が、女子よりも中間的職業比率が高いのであるが、しかも同じ第Ⅳ水準の中でも、多かれ少なかれ高等教育を経験している者の方が、より中間的職業へのチャンスが大きくなっている。

さらに、表 2-1-9 では、労働者として就職した男子のうち、わずか3年以内の職業経験の中で、中間的職業への異動・転職を経験した者があり、特に高等教育経験者で、そうした異動や転職チャンスが大きいことがわかる。

表 2-1-7 1983年バカロレア志願者の現職と職業カテゴリー

1) 第IV水準・男子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
中間的職業 (Professions intermediaires)	2 5	2 9	5 1	3 7
事務職員 (Employes)	3 6	4 0	3 0	3 4
労働者 (Ouvriers)	3 7	2 6	1 4	2 4
その他	3	5	5	4
計	1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0

2) 第2次産業系・第IV水準・男子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
中間的職業 (Professions intermediaires)	2 7	3 9	5 9	4 4
事務職員 (Employes)	2 2	2 4	1 7	2 1
労働者 (Ouvriers)	4 9	3 6	2 0	3 3
その他	2	1	4	2
計	1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0

3) 第3次産業系・第IV水準・男子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
中間的職業 (Professions intermediaires)	2 2	1 8	4 2	3 0
事務職員 (Employes)	5 1	5 9	4 3	5 0
労働者 (Ouvriers)	2 3	1 5	7	1 4
その他	3	8	8	6
計	1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0

(1) バカロレア志願者のうち、最終的に高等教育の第1から第3水準の資格を取得した者を除く。

(2) 第2次産業系としてまとめられているのは、工業系BTn、およびバカロレアC,D,Eである。

(3) 第3次産業系としてまとめられているのは、第3次産業系BTn、およびバカロレアA,Bである。

出所: CEREQ、EVA 調査1988年。

D.Blondet,1991, 'Le Bac et l'Emploi', BREF No.65, CEREQ

表 2-1-8 1983年バカロレア志願者の現職と職業カテゴリー

1) 第IV水準・女子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
中間的職業 (Professions intermediaires)	1 1	1 0	3 1	1 8
事務職員 (Employes)	7 7	8 2	6 2	7 3
労働者 (Ouvriers)	1 0	5	4	6
その他	3	3	3	3
計	1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0

2) 第2次産業系・第IV水準・女子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
中間的所業 (Professions intermediaires)	2 6	4 1	5 5	4 3
事務職員 (Employes)	6 0	5 1	4 0	4 8
労働者 (Ouvriers)	1 4	8	3	7
その他	0	0	2	2
計	1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0

3) 第3次産業系・第IV水準・女子計

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退	計
中間的職業 (Professions intermediaires)	9	8	2 6	1 5
事務職員 (Employes)	7 9	8 5	6 7	7 7
労働者 (Ouvriers)	9	5	4	6
その他	3	2	3	2
計	1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0

- (1) バカロレア志願者のうち、最終的に高等教育の第1から第3水準の資格を取得した者を除く。
 (2) 第2次産業系としてまとめられているのは、工業系 BTn、およびバカロレア C, D, Eである。
 (3) 第3次産業系としてまとめられているのは、第3次産業系 BTn、およびバカロレア A, Bである。
 出所: CEREQ, EVA 調査1988年。

D.Blondet, 1991, 'Le Bac et l'Emploi', BREF No.65, CEREQ

表 2-1-9 1983 年バカロレア志願者における労働者から中間的職業への
職業移動（第Ⅳ水準・男子）

	バカロレア 未 取 得	バカロレアから 直 接 就 職	バカロレア後の 高等教育中退
工業系 BTn	1 3	2 1	4 1
第 3 次産業系 BTn	5	0	4 3
科学系 BAC	1 4	2 4	5 1

注：(1) 初職で労働者として雇用された者のうち、現職が中間的職業である者の比率。

(2) バカロレア志願者のうち、最終的に高等教育の第 1 から第 3 水準の資格を取得した者を除く。

(3) バカロレアの分野分けは、表 2-1-6 を参照。

出所：CEREQ、EVA 調査1988年。

D.Blondet, 1991, 'Le Bac et l'Emploi', BREF No.65, CEREQ

3. 第Ⅳ水準の教育・訓練課程の労働市場における評価⁽¹⁾

水準Ⅳの教育のさまざまな課程は、職業と職能についての多様なタイプを提出している。たとえば、職業免状は、経験の積み重ねが仕事の能力を高めていくという前提のもとにあり、さまざまな経験を認めることに配慮している。

これに対して、テクニシャン免状は、経験による職能の原理とともに、むしろ初期の理論的な教育を基礎としている。技術バカロレアは、変化する具体的な職業状況に対応する職業能力という論理に従っていることになる。なお、1985年から導入された職業バカロレアの性格については、まだ評価は未確定の要素が強い。

他方、普通教育バカロレアは、その資格を有している者を高等教育を続けることへ差し向けるという性格をもっているが、労働市場にとっては、その限りでは限界としての役目しか負わされていないことになる。普通教育バカロレアの資格所有者が、実際の労働期間に直接入ることは 3%程度でありしごく稀である。しかし、バカロレア不合格やバカロレア取得後の高等教育中退などで、普通教育バカロレア課程からの「卒業者」約50,000人（水準Ⅳ資格保有コーホート人口のほぼ40%）が、専門的な教育や技術訓練、職業訓練をうけずに、一般教育だけで社会に出ていっている、という問題がある。

以下、それぞれの資格についての特色をみよう。

⁽¹⁾ 以下の記述は、CEREQ, "Baccaraureat Professionnelle", Collection des Etudes no. , 1989 からの要約・抜粋である。

1) 第Ⅳ水準の各資格と職業バカロレア導入

職業バカロレアは、広範囲の職業参入を念頭において新たな水準4の免状を創設し、それによってBEPやCAPなど第Ⅴ水準の免状所有者の学業継続の可能性を高めるという、2つの目的に込めるものとなっている。その結果この制度に対する期待が急増している。ただし、まだその成果を評価する段階ではないようである。また、こうした期待は、必ずしも労働市場の側の実際の要求を反映しているとはかぎらないわけである。

さて、第Ⅳ水準の資格に関わる就職機会は、科学・工業系の修了者と、文学・経済・第3次産業系の修了者との間で、大きな格差がある。科学・工業系の方は、少数なのだが、職業チャンスでは最高の条件を享受している。それに対して文学・経済系の方は、量的に多くの人数を占めているのだが、安定した職業に就くのは科学、工業系よりも難しい。

このような状況のなかで職業バカロレアは創設されている。つまり、第2次産業を専門とするものにとっては、このバカロレアの設置が、適切な専門化によって職業への参入チャンスをより高めることが可能となる。第3次産業を専門とするものにとっても、このバカロレアによって雇用者の要求する適切な資格となる可能性を秘めているのである。

職業バカロレアからの就職機会拡大の展望の大きい職業領域としては、1) 事務・秘書的な職業、2) 販売関係の職業、3) 生産・メンテナンスの分野があげられている。たとえば、事務の仕事は、伝統的にきまりきっていて比較的安定した手続きに専念することから、オフィスオートメーションを技術的に制御し、情報を論理的に操作し活用する技術的な職能が、明確に見えてくるからである。また、生産工程やメンテナンスの分野でも、今や診断や統合の能力が不可欠になり、より日常的な工程の監督という職務が拡大し、メンテナンス技術者などの新しい職能領域が現れていると考えられている。

また、職業バカロレアへの期待の高さは、ひるがえって普通教育バカロレアや技術バカロレアとその教育に対して、再考を促すものとなりつつある。

2) 技術バカロレア

1968年に制度化された技術者バカロレアは1986年から技術バカロレアへと名称を変更している。この技術バカロレアは、教育内容はほとんど変わっていないけれども、資格取得者のアイデンティティーの象徴的な変化がすすんでいる。つまり、1968年に技術者バカロレアは「技術者バカロレア所有者の学位及び技術者の資格を授与する」と規定されていた。1986年には技術バカロレアは「バカロレア所有者の学位を授与し」さらに「このバカロレアの肩書きを所有している者は技術者の活動を訓練する資格を有していることを証す」と定義されており、そこでは、普通教育バカロレアと

の差は単に専攻の差以外にないことを示唆している。

国立教育省のデータによれば、この技術バカロレア取得者の学業継続の割合が1975年の46.7%から1985年は61.4%まで上昇している。ただし、この資格取得者全体が増加したため、技術バカロレアから職業生活を始める者も、実数でみれば増大を続けている。

その中を、専門分野別にみると、第3次産業系列（G科）の修了者では、その関連する分野へ69%が就職しており、他方第2次産業系列（F科）修了者では49%である。

この資格に関わる労働市場は、もっぱら第3次産業での雇用が急速に発展をとげ、その雇用の供給源として水準Ⅳと水準Ⅲに多く頼っているのである。

第2次産業に関しては、技術バカロレアとともに、テクニシャン免状の課程があり、2つの教育が部分的にはあるが競合する位置にある。特に建築業と公共の土木事業、冶金業と機械工学の領域で、近い傾向にある。

第3次産業に関しては、むしろ逆に領域の棲み分けがみられる。つまり「サービス関係（ホテル業、観光、輸送）にはテクニシャン免状から多く就職し、事務職や商業関係では技術バカロレアから多く就職している。

3) テクニシャン免状と職業免状

テクニシャン免状は、工業系の技術バカロレア以上に細分されており、60以上のセクションで10,000人の登録者がある。

他方、職業免状は、取得方法からみて生涯教育的側面をもっている。ただし、この免状の登録者は、1986年に80の専門分野で7000人以下というように少なくなっており、将来的可能性としては、この免状を無視するか、この免状をより重要な課程に同化させるかのどちらかの方向だといわれている。

これらの教育は、4つの職業グループによって導入されてきた。すなわち「機械や道具、自動装置についての仕事」「財政・会計における技術、事務のO A化」「保健衛生、診療補助部門、社会サービス」「個人看護」の分野である。代表的な「財政または会計の技術、事務のO A化」の分野は、80年代初頭までは、この免状の合格者の半数を占めており、この免状は社会的にも充分認められていた。ところが、今や定員は一定に保たれているものの、志願者が次第に集まらなくなっている。別の分野でも、これらの教育が、職業の刷新を遅らせるような結果を招いている、という批判もある。

4) 普通教育バカロレアと就職

普通教育バカロレアの資格所有者で直接労働期間に移行する者は約3%で、しごく稀である。しかし、図2-1-3にみるように、1983年に普通教育バカロレアの受験登録者のうち3割が、結局試験に不合格のあと翌年留年せず、バカロレアの資格を持たずに教育制度から離れるか、あるいは、バカロレア取得後に高等教育を始めたあとで、より上級の資格をとらず教育制度から離れていつている。とくに、文系のA科、B科ではバカロレア不合格が20%あり、第IV水準での就職者が合計4割にのぼっているのである。

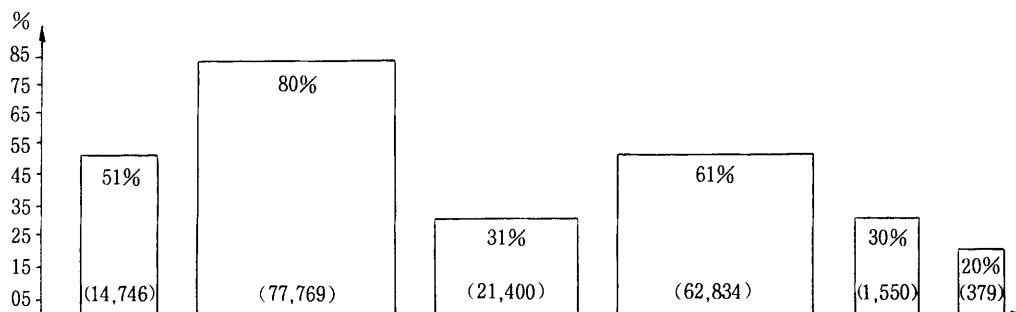
換言すれば、普通教育バカロレア課程からの卒業者約60,000人が、専門的な教育や技術訓練、職業訓練をうけずに社会に出ていつている。

ただし、この第IV水準での一般教育修了者の労働市場での状況は、教育体制からドロップアウトしたというような評価ではなく、むしろより肯定的な評価を得ている。

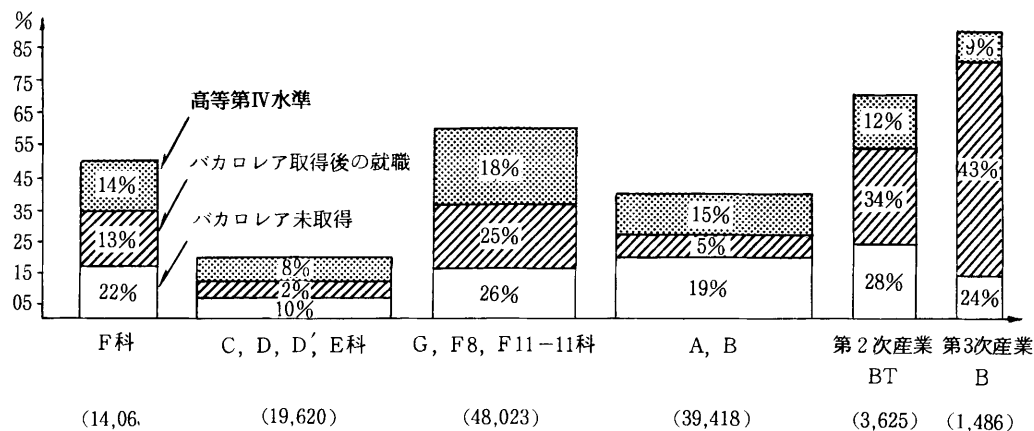
CEREQのさまざまな調査によれば、雇用者は、一般教育の修了者をより好む傾向がある、という。つまり、彼ら一般教育修了者の状況適応能力をより高く評価し、逆に特殊な技術的知識を犠牲にしても、一般教育修了者を採用しようとするのである。あらゆる職業に共通して求められる人間関係面を考慮して、作文や会話などのコミュニケーション能力が、社会に同化するための保証とみなされている。あるいは、分析や演繹などの基礎的な論理的操作能力が、技術的で予測可能なシステマティックな変化に適応することの保証となっているなど、一般教育が提供する能力への肯定的な評価が企業側にあるという。

図 2-1-3 バカロレア志願者の教育資格タイプ別の 3 年後の進路状況
(1983年度中学校修了)

第 I, II, III 資格水準 (バカロレア + 2 年以上の教育)



第 IV 資格水準



修了者計 28,811 人 97,389 人 69,423 人 102,252 人 5,175 人 1,865 人

資料出所 : CEREQ, Collection des Etudes No.49, 1986.

第2節 短期高等教育と就職

1. バカロレア拡大と大学入学問題

中等教育の修了資格であるバカロレア拡大のトレンドは、それが伝統的に大学入学資格を伴うものであるため、高等教育段階の量的な拡大やひいては構造の変化につながっている。高等教育の規模が全体として拡大しているが、そのなかでも1970年代からとりわけ急速な拡大をしているのは、図2-2-1のように、比率的にはSTS（上級テクニシャン養成課程）である。この課程は、多くリセに併設された専攻科という形態をとりながら、ビジネス志向の実学的な教育を提供している。また、同じく実学志向を鮮明にした短期課程であるIUT（技術短期大学部）の拡大も急であり、大学内の一部門であるけれども、他の教育課程との特質の違いが大きく、今や別機関といってもよいくらいである。

これに対して、伝統的な高等教育機関である大学（特にDEUGなどの第1期課程）は、比率的には大きな拡大をしていないが、もともと高等教育セクターの量的に大きな部分を占めており、学生増加を実数でみると、やはり顕著な拡大をしている。しかし、重要な点として、それは必ずしも大学に人気が出てきたということの意味していない。むしろ、バカロレア取得層の拡大の結果としての、「ネガティブ・セレクション」というか、不本意な進路選択であることも多いと指摘されている。柔軟性の乏しい大学に対して、この急激な大学入学資格取得層の拡大が新たな問題を持ち込んでいるのである。

つまり、政策的に当初意図されていた職業バカロレアも一定比率拡大しており、その制度の定着への一定の評価もあるけれども、大学入学に直結する普通教育バカロレアや技術バカロレアの拡大がそれを上回り、国民の教育要求は、続いて高等教育進学へと向かっているのである。

こうして、大学ではナポレオン以来とフランス人が誇る教育制度の原則をいかに運用するかという課題を生じさせている。結局、原則として選抜をしないことと、現実的な対応とは微妙なずれがあり、特にパリなど大都市では、学生数の増加とともに、各大学が独自になかば公然と選抜を行っている。その結果、パリ大学の中でも入学可能なバカロレア成績が相当高いところも出てきているという。

ともあれ、大学の2年間の第1期課程は、そもそも第2期以後への進学準備教育であり、入学者の急激な拡大と職業に直結しない教育内容の故に、この段階で得られるDEUGの学位は、職業への参入のための実質的な手段とはなっていない。しかも、1年の留年を加えて3年間まで第1期課程への在籍ができるが、それでDEUGを取得しなければ、自動的に退学となるため、大学での留年・中退自体が高い比率に上っている。

2. 短期の高等技術教育の人気

技術短期大学部（IUT=Institute Universitaire de Technologie）の人気上昇も、大学の一般教育の問題を一層複雑にしている。すなわち、IUTは、大学の付属機関であり、普通教育バカロレアよりも実学的な技術バカロレア（F、G、H）取得者を当初の顧客として想定し、中堅のテクニシャン養成をねらって1966年創設されたものである。この実学志向の教育が、テクニシャンとしての就職実績の高まりとともに高く評価されることになり、人気が高まってきた。そのため、今日では、各学校で、バカロレアの成績による選抜を実施している。評価の高まりが、さらに普通教育バカロレア取得者の進学希望対象として注目されることになっている。

合わせて、バカロレア取得者の多くが、リセの専攻科にあたるSTSコースに集まっており、この課程もバカロレアの成績による選抜をすることを原則としており、その評価はそれぞれ設置しているリセの評価にも関わるが、その実学的な性格が好まれている。

近年の高等教育各機関の学生数の増加について、1973年を基準にしてみると、先の図2-2-1のように、STSコースの拡大が急激であり、実数的にも比較的大きな規模を占めるに至っている。

結局、バカロレアを取得しながら、必ずしも良い成績でなかった学生が、とくに技術バカロレアを取得しながら、原則無選抜の大学へ進学するという「転倒」した現状になっている。各バカロレアタイプごとの進学先高等教育の構成は、表2-2-1の通りである。技術バカロレアから進学、とりわけ大学へ、普通教育バカロレアからSTSへという増加傾向を読みとることができる一方、IUTへの進学率が顕著な低下傾向をみせている。

前節でも扱ったように、技術バカロレアは、本来IUTやSTSへの進学が見込まれているとはいえ、あくまでも「バカロレア」であり、そのことは大学側が提供する大学教育と学生の学んできた技術教育とのズレを問題にすることができるとしても、学生にも大学で学ぶ権利があるということになっている。こうして大学へ大衆化の問題が渡されることになっている。一般の大学の方には、旧来通りの上層の学力レベルの学生とともに、IUTやSTSに入学困難な学力レベルの学生まで、多様な学生を抱えることになっている。こうして、現実の量的にはもはや「エリート教育」ではないものの、大学教育の側が伝統的な教授方法を取り続けているため、その教育についていけない学生が大量に出現しているのである。

表 2 - 2 - 1 バカロレア取得後の進学状況

	普通バカロレア (A,B,C,D,D',E)				技術バカロレア (F,G,H)			
	1972	1978	1981	1989	1972	1978	1981	1989
大学（二重登録を除く）	61.5	58.3	63.5	64.5	14.8	16.9	19.5	25.0
技術短期大学部（IUT）	7.7	7.3	8.0	8.5	17.7	14.7	12.0	8.0
グランゼコール準備級（CPGE）	11.9	12.9	12.5	13.5	0.3	0.8	1.0	1.0
上級テクニシャン過程（STS）	5.5	8.9	10.0	11.0	17.7	19.0	24.0	41.0
高等教育進学率小計	86.6	87.4	94.0	97.5	50.5	51.4	56.5	75.0
バカロレア取得者総数	147,352	157,227	161,389	230,203	36,844	61,036	63,389	109,411

注）：バカロレア取得後 1 年目の進路である。

出所：DEP, 'Notes d'information' No. 73 - 38, 79 - 33, 90 - 25, Ministère de l'éducation Nationale

3. 高等教育第 1 期の各教育課程

高等教育の最初の 2 年間が、第 1 期と呼ばれるものであり、多様な教育機関がこの段階に関与している。それらの教育課程を修了したばあいに取得できる国家資格が、第Ⅲ水準の資格である。

1) 大学技術者免状（DUT : Diplôme de Universitaire Technologie）

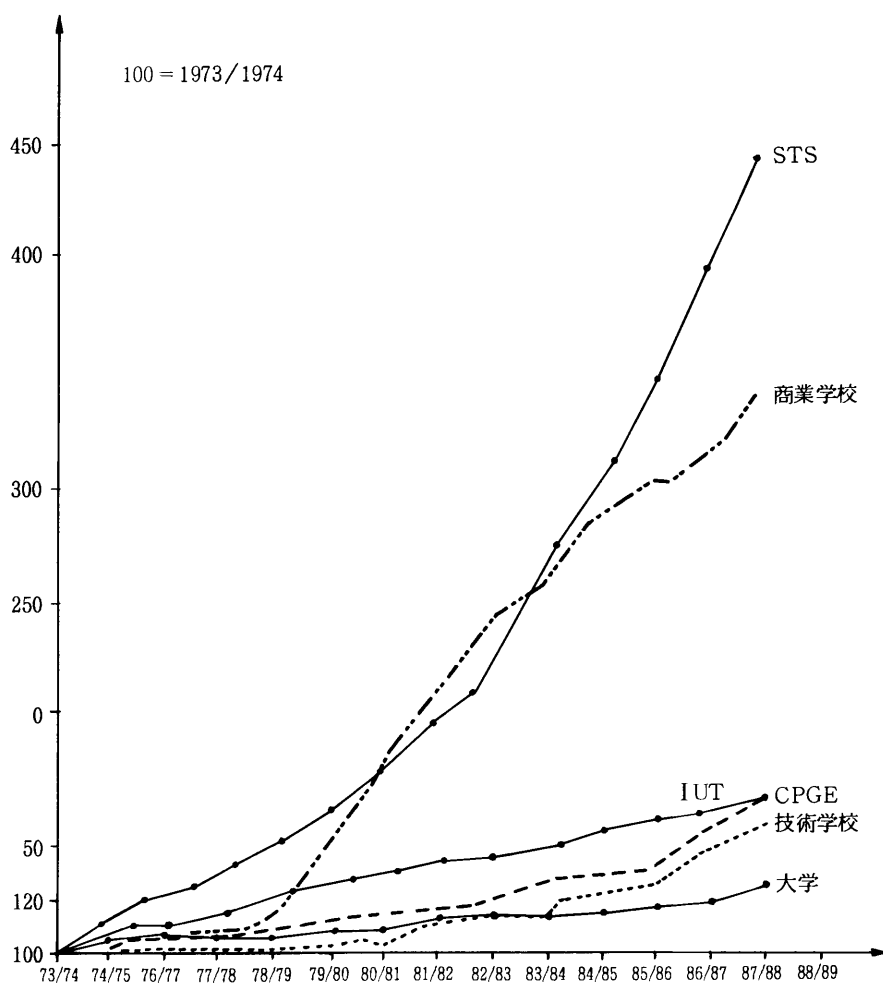
技術短期大学部（IUT）は、大学に付設されており、19の専攻分野がある。そこでは、すべての産業分野に関わる上級テクニシャンの養成を行っている。学生は、2年間で2000時間の学習が課されているが、特に現実の職場での即戦力としてスムーズに職業へ参入できるよう、教育課程への配慮がされている。つまり、学習の半分は、応用科学や実務技術に関するものであり、研究所や実験室その他の職場でのグループ実習が課されている。IUTでの1年目の学習は、もっぱら基礎的な共通科目の学習に向けられ、2年目に各大学内での専攻科目の学習が続く。この2年間の間に、6週間から8週間の企業実習が課されている。

2) 上級テクニシャン免状（BTS）

上級テクニシャン課程（STS）は、多くはリセの中に専攻科として設置されており、このばあいはグランゼコール準備級（CPGE）と同じ設置形態である。また、私学で単独の上級テクニシャン状（BTS）コースを単独で設置している学校もある。おもに第2次・第3次産業分野での上級テクニシャンの養成を意図している。IUTが創設されたとき、このSTSはその特徴の重複が問題視された時期もあるというが、IUTの人気上昇とともに、実務的な職業技術教育を提供す

図 2-2-1 主要高等教育機関における在籍者の状況
(1973年度から1988年度まで)

	在 籍 者 数			
	1973-1974	1978-1979	1983-1984	1988-1989
大学第1期	711,683	798,137	865,153	956,158
STS	37,039	56,772	93,901	163,791
IUT	39,280	50,283	57,817	67,465
CPGE	33,771	39,470	44,003	57,940
技術学校	33,021	34,359	40,412	52,782
商業学校	9,688	12,059	24,578	33,265



るという共通性も評価され、今日では両者の併存での発展が図られている。

S T Sでは、学習の3分の1は一般教科であるが、残りは、工業、商業分野での実地的な教育、実務的訓練に比重がおかれている。特に1年目には、各産業での職場実習を課している。I U Tと領域的にも、実学志向という点でも重複する側面を持っているが、S T Sの方が、実務訓練の比重がより大きくなっている。

筆者らが1992年に訪問したマルセイユ（Marseilles）のリセでは、国際化への対応として語学教育に力を入れている貿易科の20数名のクラスの2年生の生徒たちと面談することができた。すでに、それぞれドイツ・イギリス・イタリアなど、さまざまな国の企業で実習を積んでいた。彼らは、あと1年間の学習の後、B T Sの資格を取得することになるのだが、実習を受けた企業へ就職したいという学生もいた。また、進学時に、商業系のグランゼコール進学が第1希望だったと答える学生もいたが、このS T Sが第1希望と答える学生が多かった。

なお、S T S教科の85が文部省所轄であるのに対して、農業分野の教科も19あり、それらは農林省所轄で、最終的にB T S Aという農業分野の資格取得につながるものである。

3) その他の高等教育第1期の資格

高等教育システムの第1期全体としてみれば、上記の2つの制度は非伝統的、周辺的であり、むしろ大学とグランゼコールという、伝統的セクターの入門的な段階である。大学では、大学一般教育免状（D E U G）を目指しての教育があり、グランゼコールに関しては、リセ付設の準備級（C P G E）が対応している。ただし、これらの資格取得ないし、選抜試験（concour）合格の後、直接に実社会に出る数は少ない。

このため、こうした高等教育の主要部分の職業参入に関する問題は、主として高等教育の第2期・第3期、すなわち資格の第Ⅰ・第Ⅱ水準からの就職として、次節であつかう。

ただし、すでに前項で指摘したように、大学入学後D E U G取得までに1年の留年が可能であるけれども、それでもこの資格取得に至らず退学し、他の領域で新たに学習を始めたり、実社会に出る学生も多い。これが「高等第Ⅳ水準」といった呼び方が定着しているくらいに、大きな規模を有している。

4. バカロレア取得以後の進路選択と中退

中等教育の最終学年を卒業した直後の数年間は、青年にとってとりわけ重要な時期を意味し、また、教育と職業におけるその後の経緯に対しても、同様に重要な意味をもっている。大学入学資格を得た一定数と、資格取得に至らなかった者が教育機関を去っている。他方で、多くの青年が高等

教育や、ポスト・バカロレア（post-baccalouréat）タイプの教育機関で、さらに別の学校教育を開始する。

1983年の普通教育および技術バカロレア、技術者免状の志願者に対して1986年11月に実施したC E R E Qの調査によって、バカロレア水準への到達者数の拡大とその後の進学率の上昇によって大衆化した高等教育における、多様な進路動向が明らかになっている。

1983年に直接、高等教育に入学した大学入学資格者の教育経験について概観すると、学業継続の傾向は、すべての学生にとって直線的な進展というにはほど遠いように見える。むしろ、高等教育入学直後の1年目は、留年や専門課程の変更、進路変更（reorientation）、さらには学業放棄などによって特徴づけられる。

すなわち、第1に、1983年にはおよそ40万人の青年が普通教育バカロレア・技術バカロレアの試験、ないしテクニシャン免状の試験を受けた。40万人の青年のうち、4分の3以上（78%）が中等教育の最終学年を卒業し、試験に失敗した22%の者は再受験のために留年した。後者の大部分の青年（68%）は、その後（多くは翌年）、バカロレアに合格している。

第2に、約32万人の卒業者は、かなりの大部分（82%）を大学入学資格者で構成され、無資格者は少数（18%）となる。

第3に、1983年6月に中等教育を修了したディプロム取得者は、68%が普通教育バカロレア（文学タイプが18%、タイプBが15%、自然科学が35%）、30%が技術バカロレア（9%が工業タイプ、21%が第3次産業タイプ）、残りの2%がテクニシャン免状を持っている。

第4に、大学入学資格者の大部分（85%）は、1986年までに高等教育での学業を開始している。翌年以後に進学する者も含めれば、有資格者の高等教育への進学率は88%にのぼる。逆に1983年度に進学しなかった大学入学資格者の4分の3近くは職業生活に入っている。

第5に、1983年度に高等教育を開始した大学入学資格者は、大学（48%）、短期高等教育－I U T・S T S・パラメディカル学校－（32%）、準備級（11%）に進路選択し、残りの少数（9%）は他の学校教育を開始している。

ただし、これは大学入学資格者によって記入された「主要な」学校教育であり、青年のうちの一定数は、同時に別の専門課程にも登録している。

さらに、この調査期間の3年間にわたる、大学入学資格者の教育的進路の変遷を分析するには、相補的な2つの視点が重要である。

第一のパースペクティブは、学生とその教育的出自、すなわち、いわゆるバカロレアの種類とを結びつけながら、学生のたどった経路を分析することを重視する。これがどの程度まで高等教育入学時における的確な進路指導と、開始する学業の経路と成功とに影響を与えることができるかを、

浮き彫りにすることが望まれる。

第二に、専門課程ごとの分析は高等教育を構成する主要な機関のいくつかを別々に考察する。すなわち、大学第1期、グランゼコール準備級、技術短期大学、STSである。

バカロレア取得後3年間の、そこに到達した学生の流れをたどりながら、その機能を明らかにするように努める。それぞれがどのようにして進路指導と選抜の二重の役割を受け止めるのか、異なったカテゴリーの大学入学資格者のそれぞれの専門課程のなかでの行動はどのようなものであるのか。もっと一般的には彼らの「有能さ」に対してどのような診断が下せるのか。

確認しておかねばならないことは、この資料に提示された結果は、1983年にディプロムを取得したか、1983-1984年度に高等教育を開始した大学入学資格者における教育変遷を対象としているということである⁽¹⁾。

大学第1期入学者の3分の1が、2・3年後にDEUGを獲得し、ただちに第2期へ進級する。しかし、大学以外の学業への進路変更や、中断後の学業再開が多いため、単純なドロップアウトは入学者の4分の1程度だろうと考えられている。

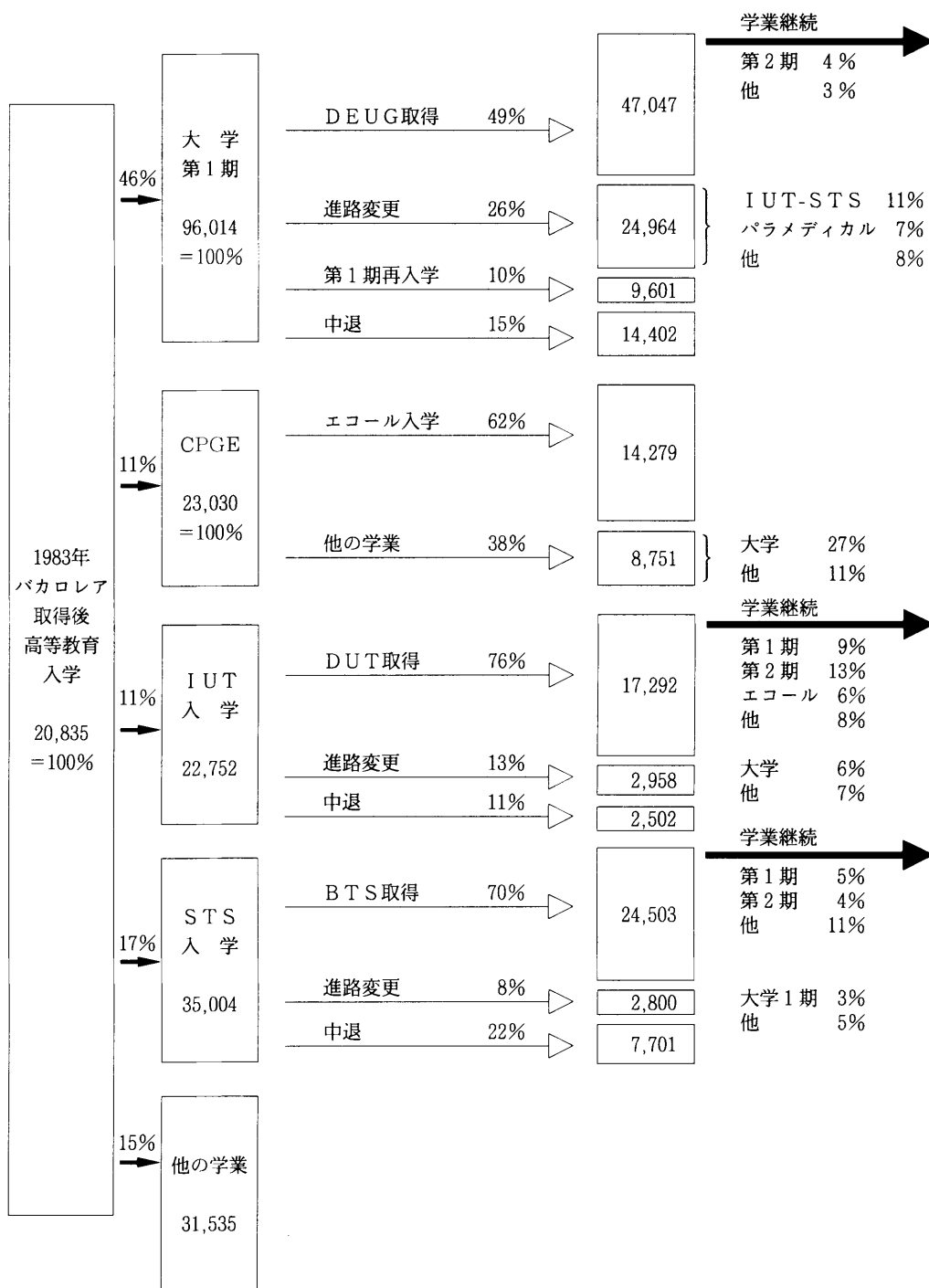
ともあれ、高等教育の第1期は、高等教育へのオリエンテーションの期間でもあり、それは進路変更など試行錯誤を許容する時期である。その結果、EVA調査1983年サンプルのばあい、図2-2-2のような進路選択の結果となっている。これをさらに各高等教育機関別に学業進展のプロセスをみたものが図2-2-3から図2-2-6であり、高等教育入学後にもさまざまな進路選択・変更をしている。

特に大学のDEUGを目指した第1期課程では、図2-2-3のように入学者のうち中退が15%、進路変更（その半数はIUTやSTS）が26%であり、1986年度に大学第1期在学中の者がまだ10%おり、3年後の段階でDEUG取得者は49.0%に留まっている。これは、1975年時の第1期課程の修了率が50.8%であるから、ほとんど改善の兆しはみられない。

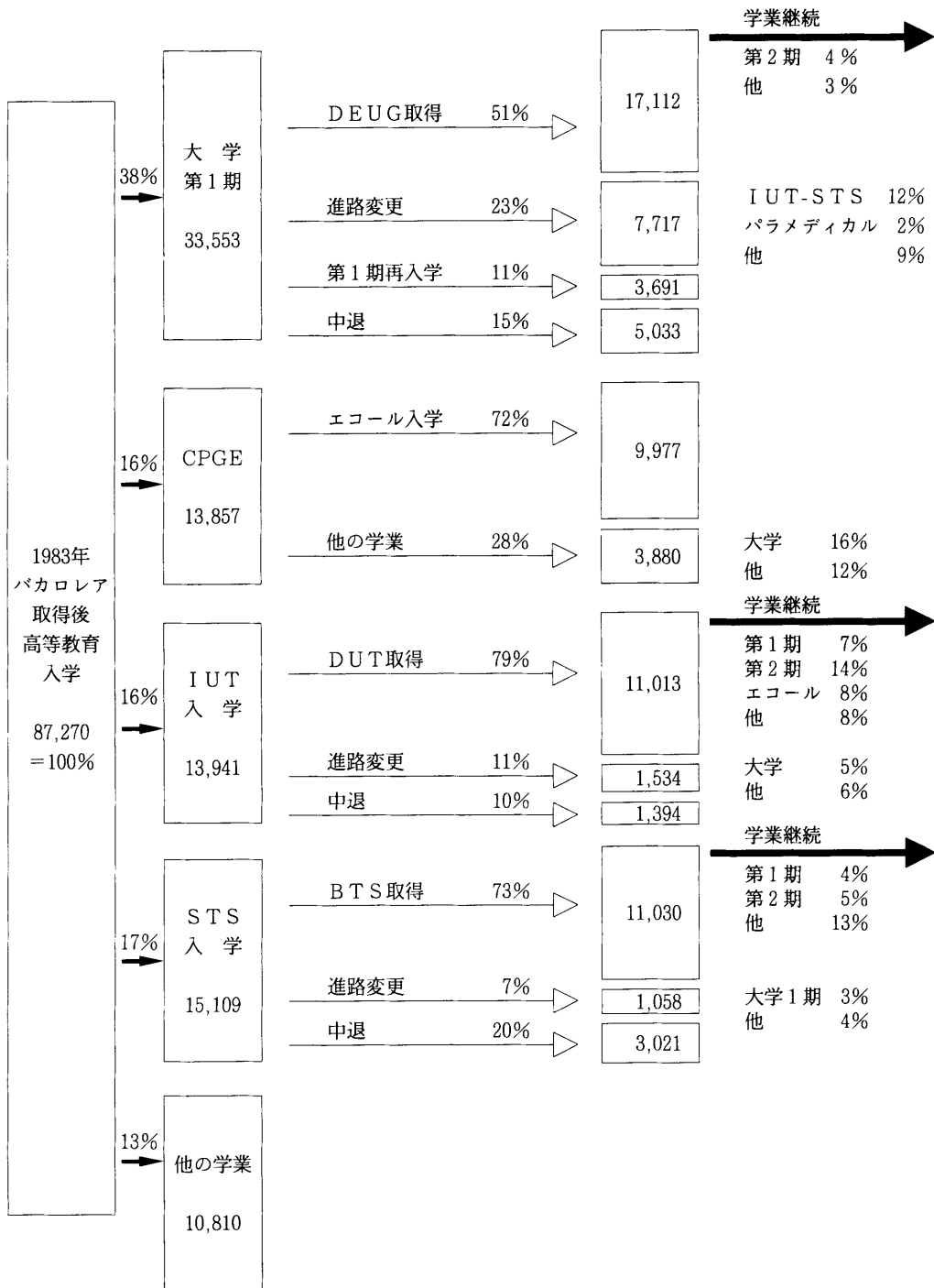
⁽¹⁾ 研究集 No. 52 1989年10月 「バカロレアの後」
「学校教育3年後の進路と成功」 Alain Charlot et Jean - Luc Pigelet

図 2-2-2 バカロレア取得者の進路

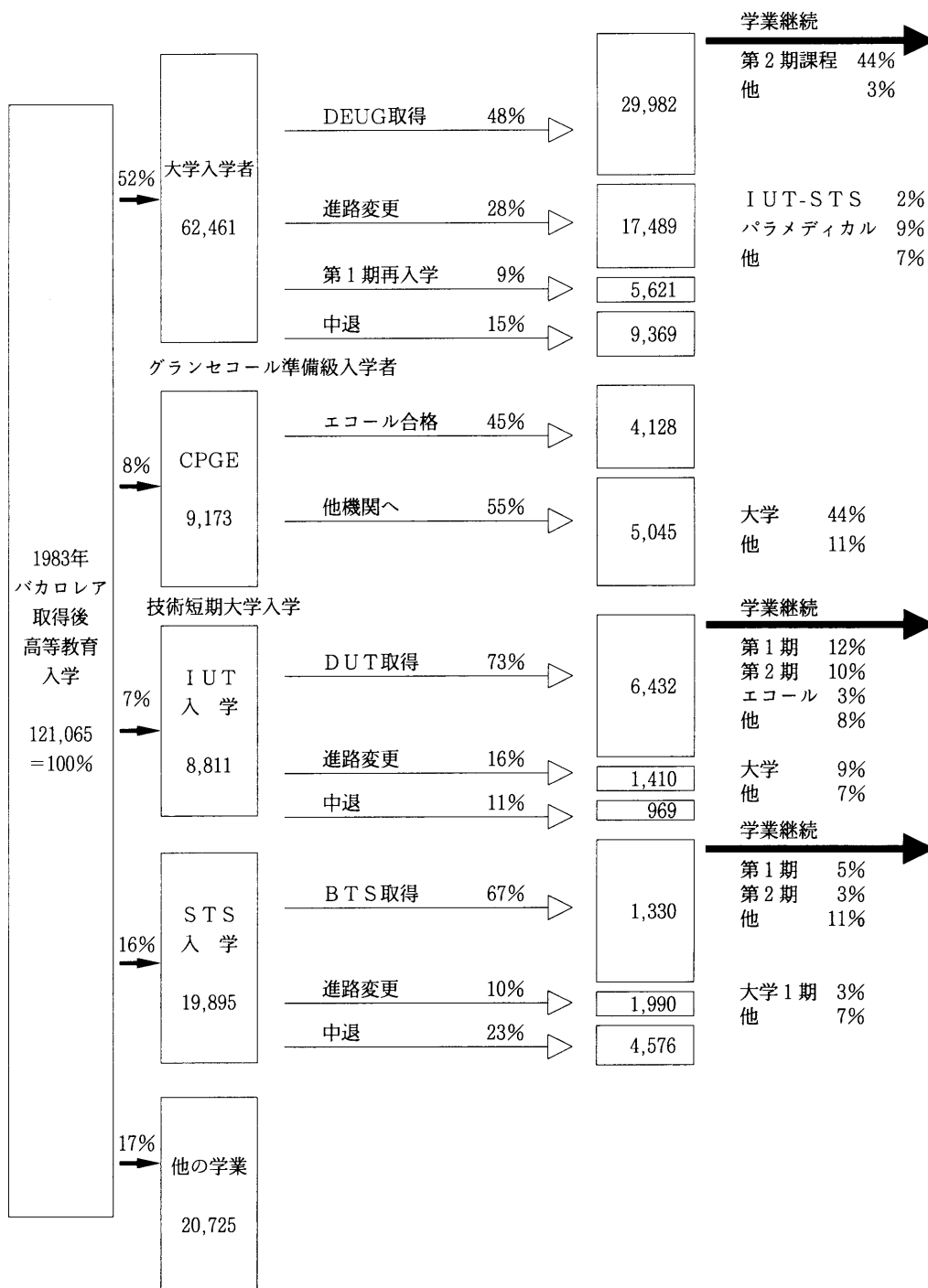
(イ) 男女計



(ロ) 男 子



（ハ）女子



資料出所 : CEREQ, Collection des Etudes No.52, 1989.

図 2-2-3 1983年バカロレア取得者の大学進学後の進路

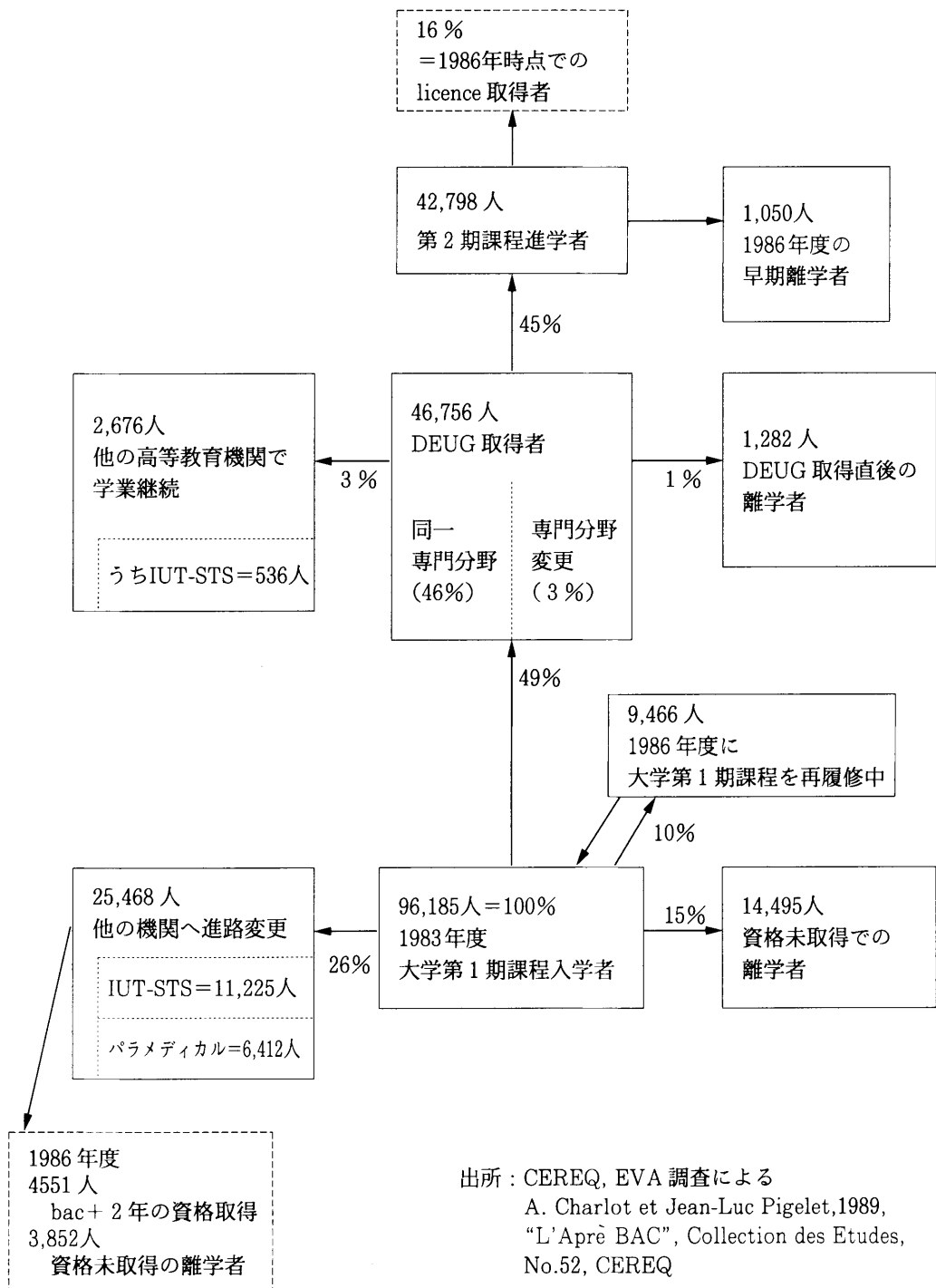


図 2—2—4 バカロレア取得者の IUT 入学後 3 年間の状況
(1983 年度バカロレア取得後の現役入学者)

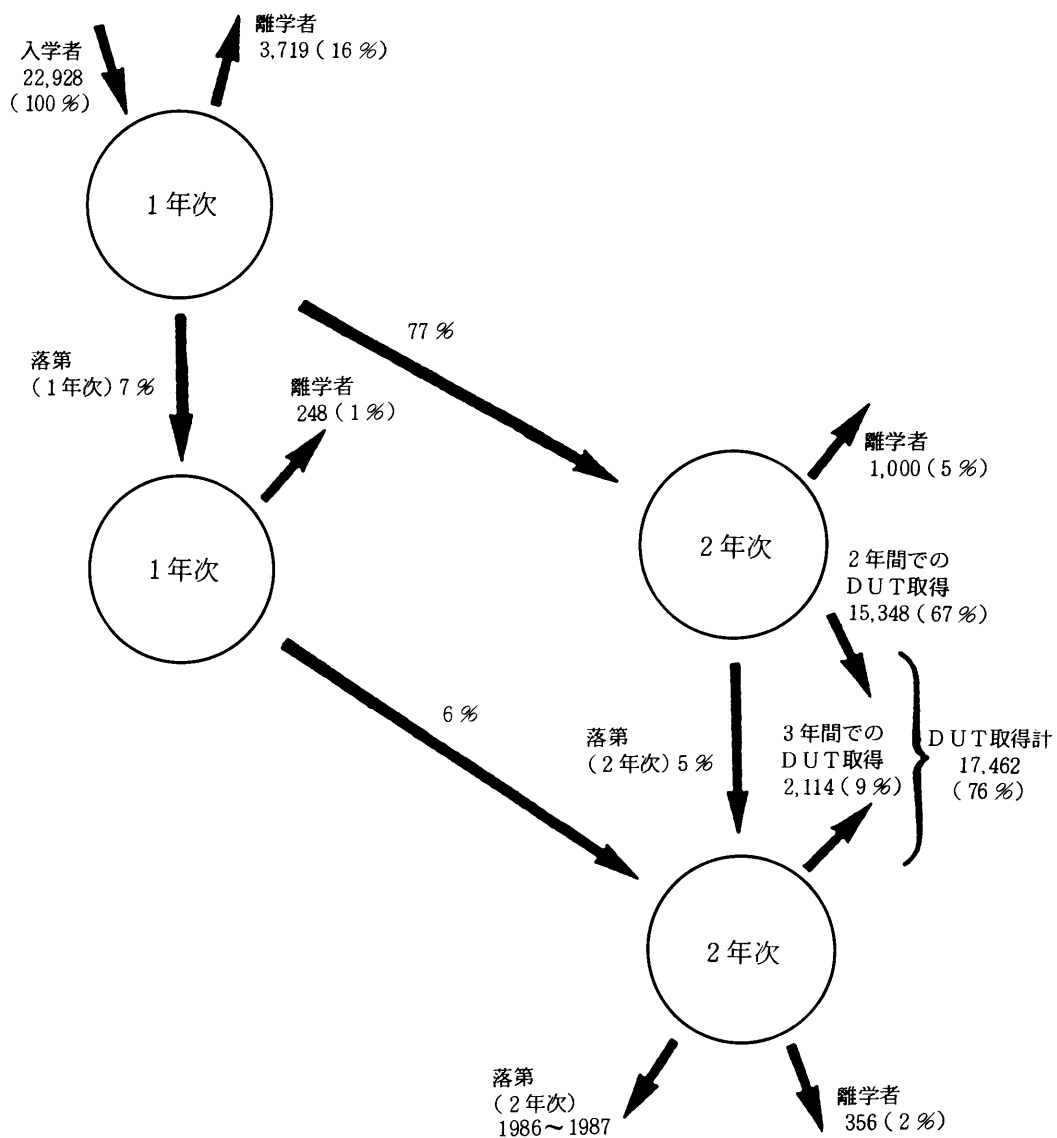


図 2—2—5 バカロレア取得者の公立 S T S 入学後 3 年間の状況
(1983 年度バカロレア取得後の現役入学者)

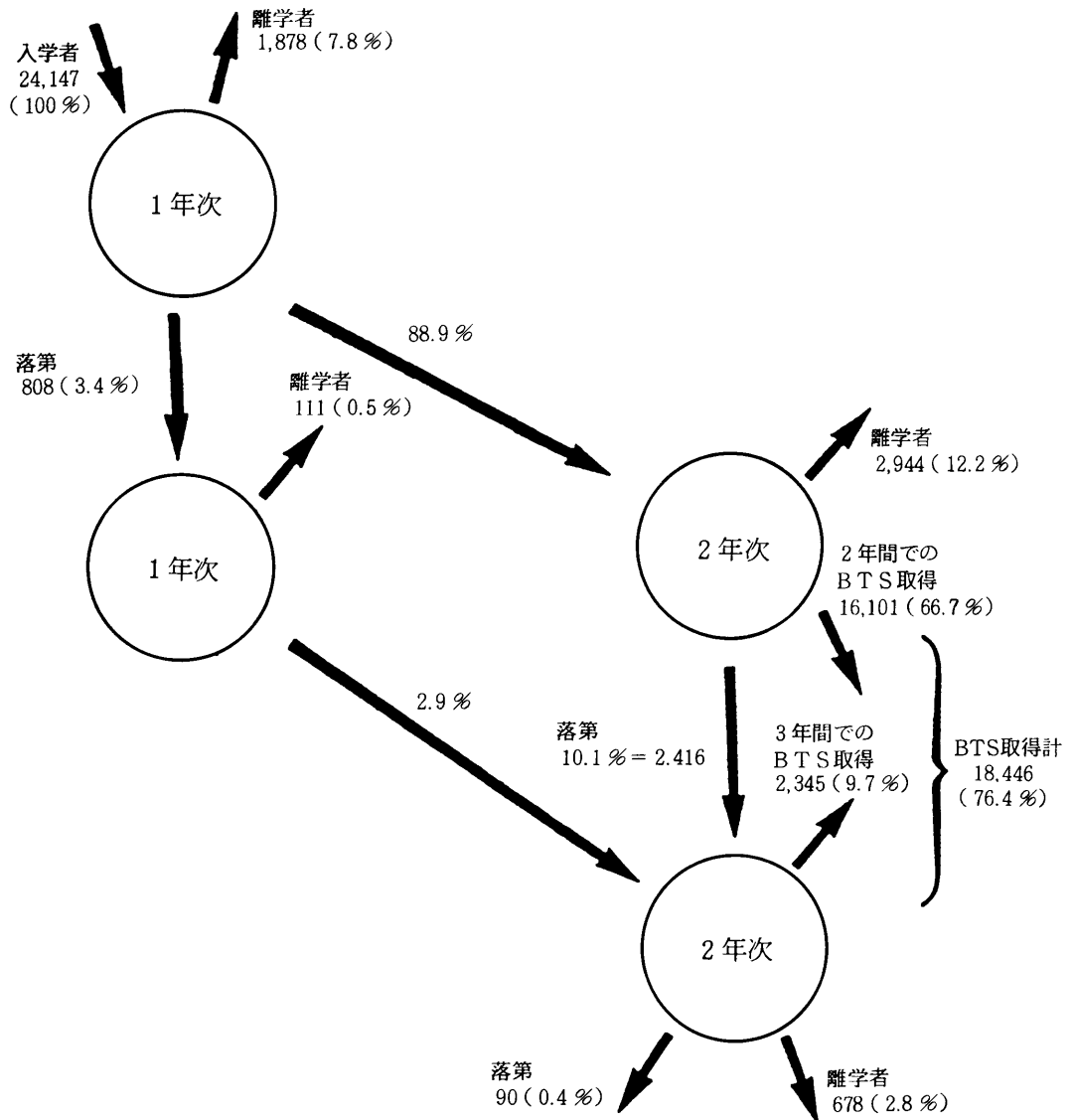
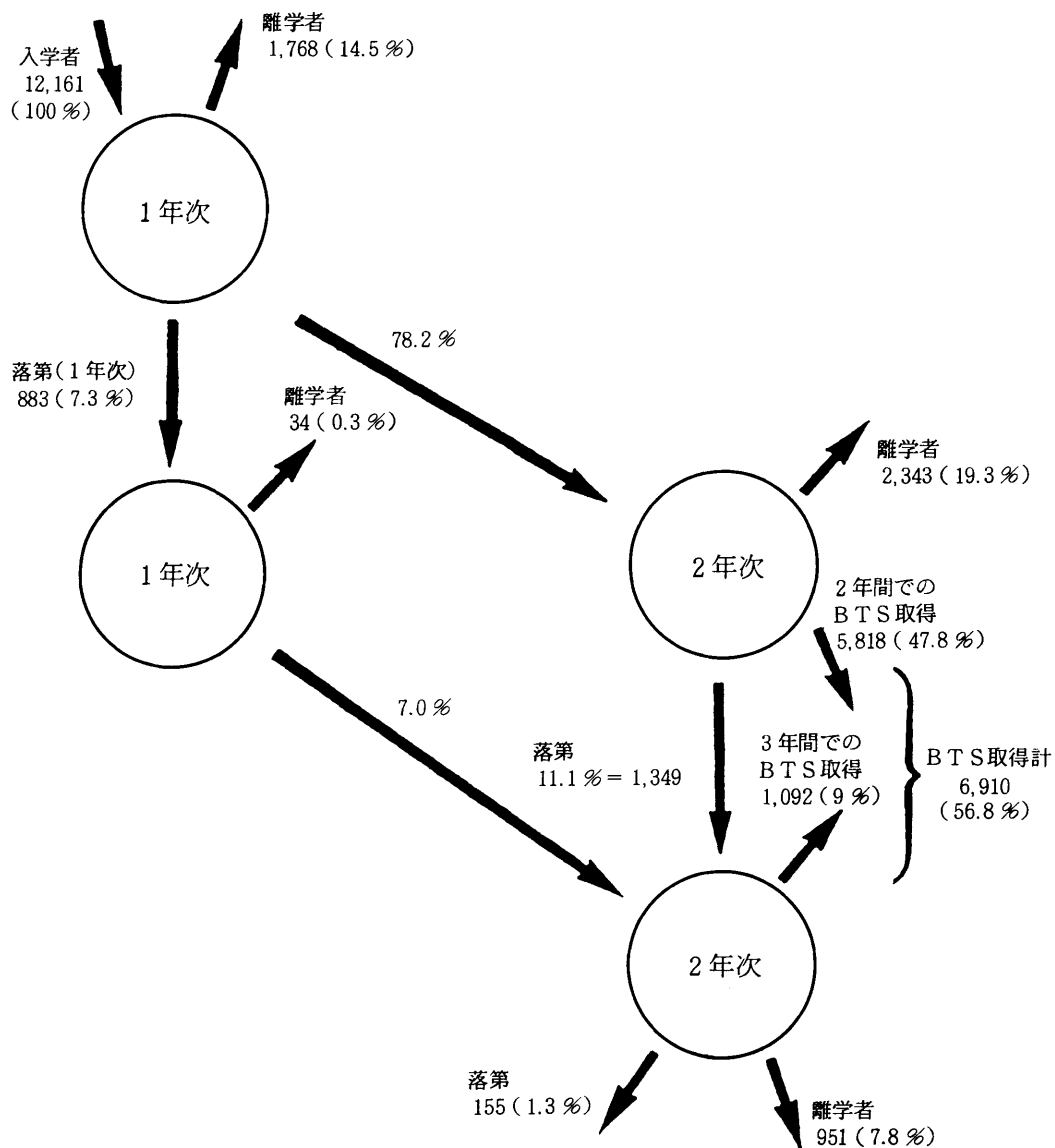


図 2—2—6 バカロレア取得者の私立 B T S 準備級 (S T S 以外) 進学後 3 年間の状況
(1983 年度バカロレア取得後の現役入学者)



5. 短期高等教育と職業参入

1) 短期高等教育と就職

職業参入に際して、短期課程の途上での離学者は第4資格レベルに位置づけられる。とはいえ、同じ第IV水準であれば、高等教育経験者の方が、バカロレア取得後に直接就職するばあいよりも、職業チャンスは恵まれており、「高等第IV水準」という表現が一般的に用いられている。前節の表2-1-4および表2-1-6から表2-1-8ですでに指摘したところであるが、バカロレア取得後すぐに職を探している者と比べて、状況は大きく異なるのである。

他方、これを短期高等教育の資格(DUT、BTS)取得者と比較すれば、同じく前節の表2-1-5と表2-1-6、表2-1-7を比較して明らかなように、第2次産業系では大きな開きがあり、DUT、BTSの9割以上がカードルまたは中間的職業へと就職しているのに対して、その比率は、「高等第IV水準」の男女とも6割以下に留まっている。ちなみに、バカロレアからの直接就職者における比率は、4割である。

第3次産業系では、DUT取得者に職業チャンスが大きく、BTSではむしろ「高等第4水準」と決定的な差異はみられない。すなわち、カードル・中間的職業比率がDUTで6割、BTSで4割、「高等第IV水準」男子で4割、「高等第IV水準」女子で3割となっている。なお、この比率は、バカロレアからの直接就職者では男子2割、女子1割になるのである。

なお、短期高等教育の第3水準と、高等教育の第2期以後の長期課程との就職チャンスの比較については、次節で検討する。

すなわち、大学在学中に得られる友人や知己などのネットワークを通して、中退者のばあいでも、比較的容易に職業を見いだすことができるというのである。しかも、男子のばあい、また理科系・技術系のばあい、女子や文科系よりも状況は恵まれているという。就職段階では、同じく第4レベルの大学中退者として、職員(employé)レベルでの採用口しかないのだが、まだバカロレア取得者(bachelier)そのものに希少価値があるため、理科系男子は、数年後には比較的容易にカードル職へと登用されるという。

2) 就職経路

CEREQのEVA調査も、就職の経路については扱っていない。教育組織上は、高等教育第1期に関する職業参入のための特別の活動はなく、DEUGからの離学者の就職問題は無視し得ないところである。

後述するように、大学進路指導室(SCUIO)は、学生に職業に関する情報も含めて提供している。また、わが国における私立大学の就職部の就職指導機能の一面に相当するものの一部は、経

営者とカードルとの協会であるAPECが果たしている。しかしそれは厳密に言えば、就職斡旋の組織ではないし、特に短期高等教育からの就職に関わるものではない。

就職経路に関しては、他の教育段階でも同様であるが、フォーマルには、直接学生が求職の応募書類を次々と送っていくことが原則である。他方で、そこに関係するOB、親族・知人の紹介を得ることや、アルバイトをしながら知己を得るなどのネットワークが、実質的に就職チャンスを左右するともいわれている。そして、中等教育修了者と比較すれば、こうしたネットワークを拡大していることが、短期高等教育段階での就職率の好調さを支えているというわけである。